

## オホーツクに漂着した油付着鳥について

(独) 海上災害防止センター 前防災部長

(財) 漁場油濁被害救済基金 漁場油濁対策専門家

佐々木 邦昭

### 1. 概要

オホーツク海に面した宗谷から知床まで約400kmの海岸は砂浜、小さな岩礁帯、岬、1と汽水湖、2、河口、3、原生花園、4、そして33の漁港からなっている。

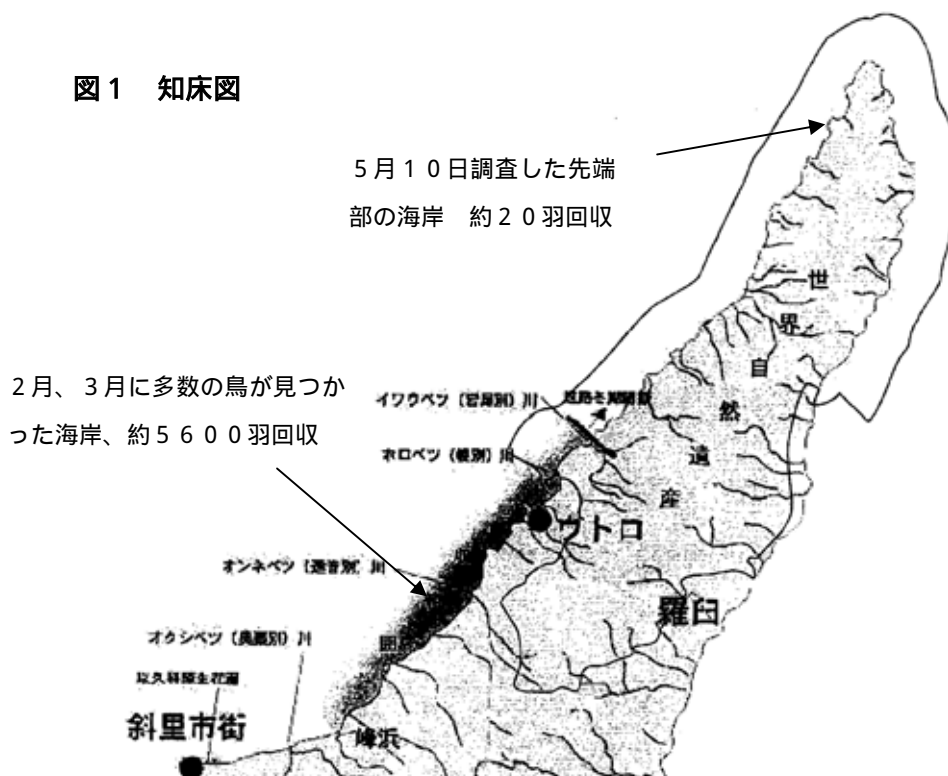
ここで漁民2,200名が漁船1,400隻を使用して漁業を営み、平成15年には56万トン、613億円を水揚げしている。その主要な魚種は、沿岸で獲れるホタテ、鮭である。また、これら水産物を基幹とした加工・販売等の二次・三次産業も盛んであり、若い漁業者が多いのもこの地域の特徴となっている。漁期は、流氷により3月中旬から12月までに制約されるが、流氷はプランクトンを豊富に伴うことで豊かな漁場を形成している。

この海岸に隣接するロシアサハリン島では、近年石油・天然ガスの開発が進み、5、その進捗に伴い、地元漁業者等からは「大規模油濁事故への対策」が求められていた。

その様な中で本年2月27日、海鳥の死骸がまだ流氷の残る斜里町周辺の海岸で多数見つけた。これらは死後相当の日数が経過し、体全体又は一部に黒々と油が付着していた。

このため、斜里町役場が中心となって組織的な調査と死骸の回収が6月中旬までなされ約5,600羽が回収されている。死因は、重油が付着したことによる凍死、溺死、多くは既にキツネ、カラス等に食べられた残骸であった。過去の例として、平成9年のナホトカ号油濁事故<sup>6</sup>では、油で汚染された1,311羽の海鳥が確認されたが、今回はその数を遙かに凌いでおり対応の油濁事故が存在したはずである。しかし、その流出源等の実態は未だ不明のままである。

図1 知床図



## 2. 調査・回収の経緯

### (1) 第1回～第3回調査・回収

3月6日、16日、29日の3回、斜里とウトロの間の海岸への漂着状況について、道、町役場、環境省等の関係者50～80名により、調査と死骸の回収が実施された。その結果、一部油の入ったドラム缶、油の付着したロープ等も見つかったが、大量の油の漂着はなく、油の付着した3,998羽が回収された。鳥の種類は、ウミスズメ、ハシブトウミガラスが殆どであった。また、オオワシも見つかったが、油で汚染された鳥を食べたのが死因であった。

### (2) 第4回調査

知床岬付近は雪が深く、陸からのアクセスができないため、調査は遅れて5月10日に実施された。岬付近は北西に開いた小さな入り江があり、地形的に油と鳥の存在も予測された。しかし、調査の結果油の漂着はなく、見つかった鳥の死骸も少なかった。

この調査はウトロから鮭定置網漁船(19GT, 20kt)に調査員10名(環境省、網走支庁、斜里町、ウトロ漁業組合、漁場油濁基金職員等)が乗船、約1時間で岬先端に近い避難港(文吉湾)に到着、ここから啓吉湾、アブラコ湾岬までの海岸線を徒歩により約3時間目視により鳥、油塊の有無について調査を実施した。岩などに飛散した油痕の有無について特に注意して観察したが、その痕跡は何処にもなかった。小さな油痕は所々あったが、これらは鳥から付着したものが殆どである。油痕は黒々としてまだ粘り気が残っているが、サンプリングが難しい程に薄い付着状態である。

何れの海岸でもビニール系の様々なゴミ、ロープ等が大量に打ち上げられているが、これらにも油の痕跡はなかった。



写真1 調査船から硫黄山を望む

白い雲の流れは、羅臼側からの風の通り道でこの海域だけは風浪が激しかった。地元ではこの風のことを「ルシャおろし」と呼んでいる。



写真2 鳥の死骸はゴミの上に乗って

いて周辺には他に油は認められない

(啓吉湾)

図2 岬付近図と写真3,4,5



文吉湾から知床岬の丘はなだらかな草原となっていて、明治初期までアイヌの集落があり、アイヌの地名もあった。現在、神の宿る島「タカサラウニ」がアイヌの名で残り、円形の住居跡も多数残っている。海岸はロープ、ビニール系のゴミで埋まっているところも多い。

文吉湾は、ウトロ漁港の避難港になっていて、番屋があり漁業者数名が定置網管理のため春から晩秋の間常駐している。

### 3. 現在での判明事項（新聞、講演会資料から）

#### (1) 油の流出した海域について

サハリン東の海域と推定されている。その根拠は「サハリン東岸には冬に卓越する南下する東カラフト海流があり、この海流は知床半島付近に到着している」「死骸の状況から漂着時期が昨年12月中頃と思われる」等である。

#### (2) 油の流出原因について

次の3ケースが疑われているが、不明である。

昨年11月サハリン東海域で座礁した大型タンカーからの流出  
同海域で過去に沈没した船舶からの流出、  
航行船舶から過失又は故意の排出

#### (3) 油種について

鳥から採取されたサンプル油の分析は、北海道環境科学研究センター、国立環境研究所、米国研究機関 OSPR(Office of Spill Prevention and Response)の3カ所で行われ、共通して油種はC重油であることが確認されている。但し、鳥への付着がC重油の風化前か後かについては不明のまま。

(4) 犠牲になった海鳥の種類はエトロフウミスズメとハシブトウミガラスが99%を占めている。これらの鳥は沖合で大集団を作り海中にダイビングする習性があるため、流出油が小規模であっても、集団で数千羽単位が犠牲になることが専門家から指摘されている。

(5) 確認された死骸は、斜里町で5,600羽、国後でも数千羽と言われており、これらの数を計8千羽とすると、鳥に付着した重油はサンプルの検量から約1トン6になる。即ち、約1トンの油が鳥と共に漂着したということでもある。

これが流出源からの全油量とは考えにくく、この何倍の鳥が犠牲になったのか、又は何処かに油が漂着しているのか確認されていない。

(6) ロシア側の発表は当初「国後島の海岸ニシキ口湖に数千羽の油の付着していない死骸があり、これらは鳥インフルエンザ感染症の可能性もある。海鳥は、ウミバト、ウミウ等」「海鳥が死ぬような大量の流出油事故はロシア海域で発生していない」「既に死んだ海鳥は今年1月に同島の海岸に漂着したと推定される。流氷と宗谷海峡の海流の流れの分析によれば、海鳥の死骸はクナシリ海峡を経て日本から漂着したことを示している。」「北海道で痕跡を探さなければならない。」「昨年11月のタンカー座礁事故で原油の流出があり、その可能性がある」等の見解を発表していた。

しかしその後、日本側の指摘もあり、死骸には油が付着しており、それが原因であることを追認し、座礁したタンカーからは流出油はない旨を公にしている。

(7) 人工衛星の映像について

5月30日、マスメディアは昨年11月に人工衛星 ENVISAT の映像について報じた。その内容は、サハリン東部テルベニア岬付近に油らしきものがあるというものであった。しかし、この情報の裏付けとして現地での確認が不可欠であるが、確認されていない。

北海道新聞記事  
平成 18 年 5 月 30 日(夕刊)



## あとがき

今回の油が付着した鳥の漂着については、その数の多さから当初大規模な油濁事故がサハリン東海域で発生、鳥だけでなく油も漂着し、それに伴う漁業被害も予測されたことから基金として実態の確認が必要となった。私は、基金からの要請を受け前述の知床岬の調査にその一員として参加する機会を得、また、関連の報告会、新聞、テレビの報道等に注目し、その主要なところを本稿に紹介しました。今回のように沖合、沿岸でも油が見つからずに、鳥だけ漂着というのは国際的にも珍しい事例であるが、調べる中で、本年1月26日エストニアのバルチック海でも似た事故があった。流氷の寄せる中で油の付着した白鳥、鴨等の大型鳥の死骸3万5千羽以上が確認されている。この事故も油の流出源等は不明のまま類似点が多い。

油の流出事故は大量の油を消費する現代社会では、どこでも避けられない問題になっている。特に新たな石油開発がなされタンカー航路が設定される近接する沿岸地域では、その地域の防災関係者は油濁事故への対応に真剣に取り組むことが必要となり、今回犠牲になった海鳥達は、関係する人々に改めてその警告を発しているように思われる。

漁業関係者も地域漁業を守るため、ある日突然漁場を襲う油の大群に対し、安全で実効性のある具体的対処（回収作業等）について「何が出来るのか」「何をなすべきなのか」等今一度確認しておく必要が在ると思われる。

- 1 目梨泊岬、ウスタイベ岬、音威子府岬、日の出岬、沙留岬、ウエンヒラリ岬、弁天岬、能取岬、カムイ岬など
- 2 クッチャロ湖、コムケ湖、サロマ湖、能取湖、網走湖、濤沸湖など
- 3 猿払川、頓別川、幌別川、徳志別川、幌内川、渚滑川、湧別川、常呂川など
- 4 エサヌカ、ベニヤ、オムサロ、ワッカ、能取、小清水の各原生花園
- 5 サハリン開発計画はプロジェクト ~ まであり、現在 が生産活動を行っている。冬場は流氷のため生産を中止しているが、来年からはパイプラインの完成により、通年生産となり、大型タンカーの往来が増加する。 は来年10月から出荷が始まる。
- 6 平成9年1月、隠岐沖でロシアタンカーが沈没し積荷のC重油が流出、福井、石川等の9府県の海岸に漂着し、我が国に最大級の油濁被害をもたらした。
- 7 日本野鳥の会で検査がなされている。エトロフウミスズメに78g、ハシブトウミガラスに194gの油が付着していた。但し、各1羽ずつの検量である。

### 参考文献等

1. 北海道新聞2月～5月
2. インターネット公開情報
3. 市民公開講座（東京農大）資料
4. 宗谷・網走支庁発行水産資料
5. 基金発行 漁業影響情報図